



機関誌 どうとくのひろば

実践事例のご紹介など、日々の授業のヒントが満載です。

各種 リーフレット

1テーマで教科情報をお届けします。

バックナンバーは、日文Webサイトでもご覧いただけます。

～お知らせ～

深井先生による「ここが知りたい 小学校道徳科 15の疑問」は、5回に分けてお届けいたします。

vol.3は、2019年6月に発行予定です。

ここが知りたい
小学校道徳科15の疑問 vol.2

日文 教授用資料
平成31年(2019年)4月26日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本資料は平成30年(2018年)度版小学校道徳科内容解説資料として扱われます。
本書の無断転載・複製を禁じます。

CD 33458

日本文教出版 株式会社
<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

ここが
知りたい

小学校
道徳科

15

の疑問

vol.2

疑問4~6

岡山市立大野小学校校長 深井 守



疑問 4

グループで話し合
わせても、自分の考えの
紹介で終わってしまいます。

疑問 5

ワークシートや吹
き出しを用意しても、書
けない子どもがいます。

疑問 6

役割演技がハチャ
メチャになってしまい
ます。

日文の教科書情報

詳しくはWebへ!

疑問 4

グループで話し合わせても、自分の考えの紹介で終わってしまいます。

「それでは、グループで話し合ってみましょう。」
と言っても、なかなか話し始めません。もじもじしているうちに時間がなくなって、一人ずつ自分の考えを言っただけで終わってしまいます。



グループでの話し合いは、「対話的な学び」として道徳科でも重視すべきだと考えます。一人だと自分の考えがもてなかったり、偏った考えしかもてなかったりするからです。このことについて友達はどうか考えているのか知りたいという場合もあります。

ところが、最初のうちは「沈黙」、そして「ざわつき」が起こります。誰からどのように話を切り出してよいのかわからないので、とりあえず黙ってしまいます。そのうちに耐えられなくなって、「ねえ、どうする?」「何を話せばいいの?」「わかんないや。」というふうにざわついてきます。

また、子ども同士の間関係ができていない4月の頃や、人の考えにあまり関心が及ばない低学年の子どもは、グループでの話し合いをするのが、難しいことがあります。そのときは、ペアでの話し合いから始めるとよいでしょう。

とにかく、グループでの話し合いの手順や方法を知らせ、慣れさせることです。そして、グループで話し合っただけという経験を積ませるのです。そのためには、道徳科以外の学習でもグループでの話し合いを取り入れてみましょう。そうすれば、子どもの方から「ねえ、先生。これについてちょっとグループで話し合わせてください。」というようになります。こうなると、主体的な学びになります。先生がグループで話し合いなさいと言うのではなく、子どもの方からグループで話し合わせてくださいと言うのですから。

1 お作法

さきに、どのように話し合うのかの**手順**や**方法**を決めておきましょう。グループなら、まず、座席をくっつけましょう。4名くらいが適当です。そして、順番に一人ひとりが自分の考えを紹介します。

次に、お互いにもう少し詳しく話してほしいことなどを質問し合います。ここで大切なのは、自分の考えと比べながら聞くことです。比べながら聞くことができると、微妙な違いについて「もう少し詳しく教えて。」と質問できるというわけです。その後は、自由に考えを言い合ひましょう。この部分がないと単なる紹介に終始してしまいます。



教師は、各グループを回って、どんな話し合いをしているか耳を傾けます。時には、「なるほど。」とうなずいたり、助言したりします。

グループ内で司会役を輪番でするのもよいと思います。付せんや短冊、ホワイトボードなどを活用するのもよい方法です。グループで話し合うのにも使えますし、学級全体で紹介するのも使えます。

2 テーマを明確に

次に大切なことは何について話し合うのかの**テーマ**を**明確**にすることです。何について話し合うかが明確でないと、話し合いが滞ってしまいます。

明確でないテーマとは、例えば、「主人公はどんな気持ちでしょう。」というような漠然としたものです。

これでは、「うれしい気持ち」「嫌な気持ち」とか、または「何がうれしい」「何が嫌」とかくらいを紹介して、話し合いは終了してしまいます。これだとグループで話し合う必要がありません。学級全体で「そうだよねえ。」と確認すれば済むことです。

グループで話し合うべき明確なテーマとは、例えば、「主人公が〇〇し続けたのは、どんな考えからだろう。」「迷っていた主人公が〇〇することにしたのはなぜか、そのわけを考えよう。」というようなことです。これらは、主人公の単なる気持ちを尋ねているのではなく、そのような言動をとった根拠をテーマにしているからです。言動の根拠は、普通一つではありませんから、グループで話し合う必要があります。いろいろな考えが出ますし、もう少し詳しく話を聞いてみたくくなります。道徳科が好きな子どもは、「友達のいろんな考えを聞くことができるから、好きです。」という理由を挙げています。

3 多様な考えがあることに気付く

他の教科や学級会では、出し合った考えをグループで一つにまとめることがありますが、道徳科ではその必要はありません。似ている考えはまとめてもかまいませんが、多様な考えが出るほうがよいからです。30人いれば、30通りの考えがあるわけで、それを伝え合うことが大切です。それこそが、物事を多面的・多角的に考えるということですし、深い学びになります。

例えば、主人公が学級の仲間と校庭の落ち葉はきを続けたわけを話し合う場合、

- ・落ち葉はきが楽しいから。
- ・みんながやっているから、自分だけやめにくい。
- ・先生が褒めてくれるから。
- ・校庭がきれいになると、すっきりするから。
- ・学校みんなのためになるから。
- ・しないと気がすまないから。

と、子どもたちから様々な意見が出そうです。他律的なものや自律的なものがある、おもしろいでしょう。



友達の考えに関心を持ち、自分の考えを自由に発言するには、日頃から友達の考えを受け入れ、違いを認め合う温かい学級の雰囲気づくりが大切です。その中心になるのが、学級担任です。子どもの発言は「なるほど。」とうなずきながら聞きます。「そうか、すごいね。先生はその考えに気付かなかったよ。」などと他と違うことも認めましょう。子どもは認められるとうれしいので、どんどん発言するようになります。自分の考えを出し合い、話し合うことがとても楽しくなります。

もし、学級に友達の考えを聞けなかったり、違いを笑ったりする雰囲気があったら、早い段階で修正しましょう。このことは、学級経営の問題でもあります。

疑問 5

ワークシートや吹き出しを用意しても、書けない子どもがいます。

せっかく挿絵を入れて吹き出しをつけたワークシートを用意したのに、書けない子どもがいます。どうすれば書けるようになるでしょうか。



回にとどめるのが理想的です。しかも、十分な時間を確保しましょう。

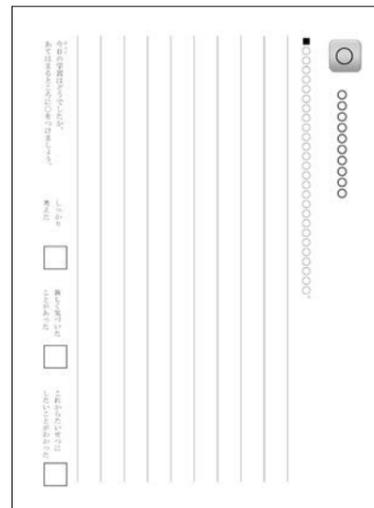
2 机間指導でチェック

赤ペンを持って机間指導をします。次の3つくらいの実態に応じた関わりをします。

- ・よく書けている子どもには、どこがよいかを指摘して褒めます。
- ・書けているが不十分な子どもには、もう少しここを詳しく書くようにと指示します。
- ・書けない子どもには、もう一度何についてどのように書けばよいのかを助言します。選択肢を示してもよいかもしれません。

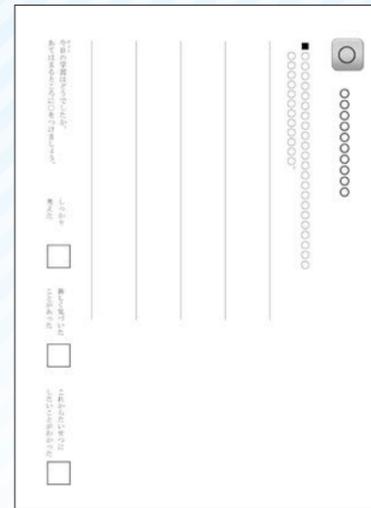
3 書式の工夫

ワークシートの罫線やマスは、書くのが苦手な子どもに合わせてできるだけ少なくしておきます。罫線がたくさんあると、見ただけで書く気がなくなってしまいます。



行数が多くて書く気がなくなる例

私は、罫線を5本で4行くらいにしています。よく書ける子どもには、付け足してどんどん書かせます。縦書きか横書きかは、教科書に合わせて縦書きにするのがよいと考えています。



ちょうどよい例

4年生の教材「四二・一九五キロ」(A 希望と勇気、努力と強い意志)の例を紹介しましょう。

休み時間に運動場を走るという取り組みで、「めざせ、42キロ完走！」と自分で目標を決めた。ところが、だんだんみんな走らなくなって、「ぼく」もボール遊びに夢中になり、走らなくなってしまった。そんなある日、机の中を整理していると、42マスのうち36マスまで塗っているカードが見つかる。

「記録カードを見つけたとき、『ぼく』はどんなことを考えただろう。」というのが、中心発問です。結局、主人公の「ぼく」は、途中止めにしていた取り組みを再開するのですが、その根拠を問う発問です。子どもには教材を最後まで読み聞かせているので、「途中止めにする」か「再開する」かではなく、「再開する根拠」を問うのです。カー

※教師用指導書の付録CD-ROMには、加工できる「道徳ノート」の紙面データが収録されています。

ドを見ている「ぼく」の挿絵に吹き出しを付けたワークシートを用意して書かせます。



子どもは、きっとこんなことを書くでしょう。

- ・よし、もう一度がんばろう。自分で決めた目標だ。
- ・ボール遊びに誘われたからって、途中止めにしたのを友達のせいにしてた。
- ・最初に自分で決めた目標「めざせ、42キロ完走！」を思い出してがんばろう。
- ・このままでは、去年と同じだ。途中止めにする自分ではいたくない。
- ・36マスも塗っている。あと42マスまで、たった6マスじゃないか。
- ・ここであきらめたら、今までの努力が無駄になってしまう。

余計な指摘はしないようにして、書けたこと自体をしっかり認めてやりましょう。

そのワークシートに書いたことを紹介し合ったり、お互いに交換して読み合ったりするのもよいでしょう。



もともと書くのが苦手という子どももいます。何をどのように書けばよいかわからないということもあるでしょう。それから、以前書いたときにいろいろ指摘されたものだから、書くのが嫌になったというものもあるか

もしれません。

例えば、「建前じゃなくて本音を書きなさい。」と指摘された、誤字脱字をいちいち指摘された、「習った漢字は必ず使いなさい。」と指摘されたなどです。私は、子どものどんな発言でもどんな記述でも本音として受け入れるようにしています。また、少々誤字脱字があっても、習った漢字を使っていなくても大目に見ています。

1 お作法

まず、何について書くのかを明確にすることです。丁寧に発問をします。数人が挙手したところで一度手を下ろさせ、ワークシートを提示します。ワークシートを示しながら、何についてどこにどのように書けばよいのかを指示します。それから、不足や重なりがないように確実にワークシートを配付します。前の子どもが後ろに渡す際は、「どうぞ。」後ろの子どもが受け取る際には「ありがとう。」と言う習慣をつけましょう。1単位時間に何度も書くのは大変です。低学年では1回、高学年でも2

役割演技がハチャメチャになってしまいます。

「うさぎさんをやりたい人？」尋ねると、「ハイ、ハイ、ハイ」とたくさんの子どもが挙手します。そこで指名して教室の前に出させ、いざ役割演技を始めると、何を尋ねても返答がありません。

「なぜ手をあげたのですか？」と問うと、「あのね、うさぎさんのお面をかぶりたかっただけ。」という答えでした。

また、おおかみ役の子どもが、終始「ガオー、ガオー」と吠えます。「吠えてないでちゃんとお話してください。」と言うと、「おおかみは、日本語がしゃべれません。」と言った子どももいました。

うれしくなって、はしゃいで、ふざけて、ハチャメチャになって、何も考えられないまま、何も気付かないまま、役割演技を終わったということが、何度もありました。



役割演技がハチャメチャになるのは、よくあることです。特に、動物のお面などを使用するとハチャメチャになりがちです。頭にかぶるように厚紙とゴムを使って作りますが、子どもの頭の大きさは様々です。子どもの頭よりお面が大きすぎて、スポッとハマって顔が隠れてしまったり、子どもの頭より小さいのを無理に付けて、ゴムが切れてしまったりします。お面が壊れたら、そこで思考停止です。



1 お約束

まず、役割演技は何のためにするのか、どんな手順や方法なのかを子どもとしっかり話し合う必要があります。「大切な気持ちや考えを見つけるために劇をするのです。決してふざけてはいけません。劇では、虫や動物になったり、男の子が女の子の役をしたりしますが、決して笑ってはいけませんよ。」というようなお約束をしておきます。

2 お作法

誰がどの役をするのかを決めます。教師と子どもでするほうが指導意図を表現しやすいのですが、子ども同士ですることでもできます。まず、全員がペアでしてみた後に、3～4組が前に出るとする方法もあります。役割を交代するとより効果的です。

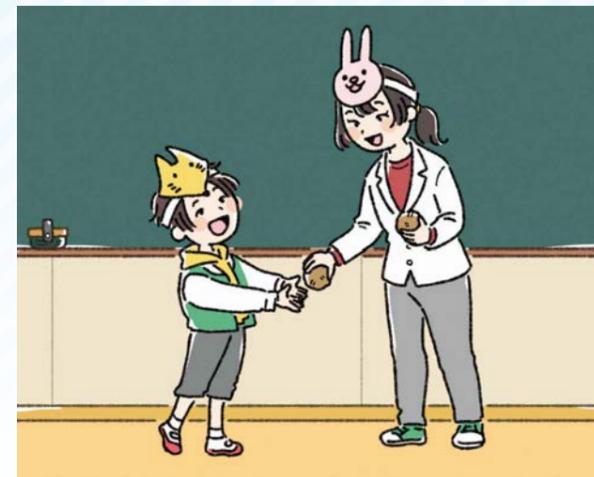
役割演技の始めと終わりをはっきりさせます。「変身」などと唱えるものよいでしょう。最初のせりふは、板書しておきます。短冊に書いて貼るのもよいでしょう。「最初はこのせりふを言いますから、続きは思いつくままに言ってごらん。」という感じです。即興で言うので、思わずふだんの自分の気持ちや考えが出てきます。そこが役割演技のおもしろいところです。

また、同時に見ている子どもにも一緒に考えさせます。後で、付け足しをさせてもよいでしょう。見ていて感じたことを発表させてもよいでしょう。

なお、お面や衣装を付けるのは、効果的なようであっても、かえって邪魔になることのほうが多いようです。ふだんから、お面や衣装がなくても、役になりきれるようにしておくことです。

3 切り返して深める

例えば、2年の教材「くりのみ」(B 親切、思いやり)では、教師がうさぎさんの役をし、子どもがきつねさんの役をします。うさぎさんが栗の実をくれたとき、取り出された栗の実を見ているうちに、きつねさんの目から涙が落ちてきます。



最初のうさぎさん役の教師のせりふは、こうです。

「きつねさん、どうして泣いているのですか。」
それに答えて、一人目のきつねさんが言います。
「ごめんなさい。」

うさぎさんが、切り返します。

「何か謝らないといけないようなことをしたのですか。」
きつねさんが白状します。
「森の奥でどんぐりをいっぱい見つけて、いっぱい食べて、まだいっぱい隠しているんだ。」

二人目のきつねさんは、こうです。

「きつねさん、どうして泣いているのですか。」
「とてもうれしいからさ。」

「何がそんなにうれしいの。」

「だって、自分勝手なぼくにも、うさぎさんはとても優しくしてくれるんだもの。」

切り返しによって、しだいに深まってきたようです。この役割演技のねらいは、きつねさんが涙を流したわけを考えることにより、自分のずるさの反省や謝罪の気持ちと、うさぎさんの優しさ感激する気持ちに気付かせることなのです。

4 フロアへの注意

フロアの子どもは、「友達が前に出てやるのだから、自分関係ないや。」と思いがちです。そうすると、聞いていなかったり、見ていなかったりします。なかには、おしゃべりをしたり、消しゴムで遊んだりする子どももいます。「あとで、大事なことを尋ねるから、よく見てよく聞いていてよ。」と釘を刺しておきます。付け足しをさせるのもよい方法です。

役割演技は、劇をして楽しむわけではなく、ねらいに迫るために道徳的価値に対する一人ひとりの考えを引き出すためにするのです。